

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	龍南
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 121: 78-90
Issue date	1907-06-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6049">http://hdl.handle.net/2298/6049</a>
Right	

龍 南

卒業の諸兄を送る

兄等と別るゝに最早十日もあるまじ。別るゝに  
蒞み人各々色々の感あり。今兄等を送らむとす  
る私の感じに悲しむべきもの二あり、喜ぶべき  
もの二あり。乞ふ遠慮無く其の感じを述べしめ  
よ。

昨秋の事一に兄等を俟つて我校に一脈の清味を  
與へたるは事實あり。此の清味永く残りて想へ  
ば常に爽々の氣生等が心に徂來せむ。清風乍ち  
に去つては樹葉の颯々を聴くも亦寸時に過ぎざ  
るべし。生等私かに之を悲しむ。悲しむべきもの  
茲に一。されど此の風扇を以て尙は蔽ふに足る  
一叢の荆棘を吹き通りて將に鬱々の密林に當つ  
て葉を振ひ枝を動かさんするを思へば生等齊く  
之を喜ぶ。喜ぶべきもの茲に一。

清風は高く空を拂つて揚がれど、埃を含む温る

き汚風は低く濁り江の面を掠む。清風是れが爲  
めに犯されずと雖も、か程に温るき汚風の荒み  
て濁波を上げし時もあるまじ。時至れば蒼蠅猶  
驢尾に付して千里を致す、汚風亦與に相連りて  
去らむとす。生等齊しく之を喜ぶ、喜ぶべきも  
の茲に二。

されど氣壓の低き野に出でくは汚風も高く揚る  
を得て、却つて清風の密林に潜むを恐る。生等私  
かに之を悲しむ。悲しむべきもの茲に二。

他は言はじ。聊か蕪辭を陳じて卒業の諸兄を送  
る（錐栗）

成功の福音を破す

僕は山中獨りエマソン集を読み、常に現代を批  
評しつゝある感を禁する能はず。

僕は常に希望を以て現代を觀る。僕は現代を愛  
す。愛するが故に満足する能はず。現代は満足  
ある進行をなしつゝ非ざる也。吾人の日本はこ

の如き進行に満足する能はず。現代の社會は「自然を見るを得ざる、太陽を見ざる者多き、見るも極めて其皮相なる」社會也。假相の上に活動する社會也。實利に生くる社會也。「健康と富とを最高の善とする」社會也。常識以上の事を知るを欲せざる社會也。渺たるストライキの爆裂彈に根底より震慄するものに安立くつゝある社會也。凡そ現代が尊崇しつゝある所のもの、努力の目的としつゝある所のもの、何れか運命の嵐、革命の波に洗はれざるものありや。小楠の達觀せし所は然らざりき、南洲の抱負は然らざりき。社會は彼等を敬遠せり。あらず、既に忘却せり。然らばこれに代はる何を得たる、常識のみ、拜金のみ、成功のみ。現代社會の中心の思想は拜金也。儒教も、武士道も、佛教も、基督教も、イチエズムも、向上主義も、近時の自覺問題もすべて與らず。成功の福音が現代の最も凱旋する所となるは宜なり。現代の社會は成功の福音

を要求する理由あり。何とあれば現代の社會は個人主義の組織、自由競争の組織を以て成れば也。

されど僕は想ふ。郷に入つて郷に従はんとして現代の青年が現代の社會組織に適應する活動を執らんとしたる時は、社會の各方面は既に其活動を許さざりしに非ざる乎。現代の社會が青年に與んとする地位は然く餘裕あるものなりや否や。僕は應募人員が募集人員に超加するの、あまりに甚しきを知る、現代の社會は青年を欺きつゝあるかり。一の桂冠を隠して多數を招きつゝあり。成功の福音は循俗の賊音也。叫で曰く、人生の目的は幸福に在り。眞の幸福は生存競争裡に勝利を博するに在り。桂冠は爾等の來るを待てり。奮闘せよ。奮闘せよと。而して自ら稱して現代に於ける最も健全なる思想なりとす。社會も然り、然りとこれに同意せり。あゝこれ果して健全なる思想なる乎。試みに成功の福音に酔

うて現代の政治界に立たんとする者を想像するに、議會よりすると、政府よりすると、其何れたるを問はず、能不能、紛然雜然無數の先輩が蟻の巖に附くが如く、がみ付きて離れざる處現代の青年が那翁に非ざる以上、所謂奮闘の生活に堪へざる可し。那翁と雖も今日平和の時代にては如何あらん。奮闘の生活は淺薄なる個人主義也。されどこの個人主義を以ては現今の政治界に成功は難し。何人と雖も官海游泳術を研究せで叶はざる也。其個人主義は何等か他の假面を被らざる可からず。實業界に轉して想像せよ。今日の大資本家は多く維新の革命前後、社會組織の動搖せる時代に成功したる者、盡く運命の賜なりとは云はざるも、其時代が眞の自由競争の行はれたる時代、十の力を盡したる者は、五の力を盡したる者の倍を利したる時代なりしは事實也。今日は既に眞の自由競争の行はれざる時代也。如何なる阿呆にても可なり、彼

れを三菱の主人とせよ。岩崎彌太郎生れ代るも盡よく彼れと競争するを得べき。人は死物狂ひに奮闘するも、機械には叶ひ難し。資本家と敵する能はざる所以也。況んや彼等は人才を容易に其麾下に招くを得るや。彼等の間に立つて競争する者は偏に運命に待つの外なし。而して運命とは必ずしも奮闘に與せざるもの也。然らば所謂民吏となりて資本家の下に馳せ參せんか政治界と等しく先客のせり合うて居る事、札止めのを入れて貰ふが如し。實業家は創見を疾み、理想を嫌ひ、習慣に従順あらん事を要求し、社交に心を勞せん事を忠告す。此の要求にいかにかにても反抗する事は成功の大禁物と知る可し個人主義の奮闘主義も此に至つて戸惑ひせざる能はず。顔は青ざめ、足は冷ねて、青年の奮闘に疲れたるを見ずや。

人生の目的は或は幸福なるかも知れず。人生の目的他に在りとするも、其目的が幸福を伴はざ

る可からざるは止むを得ざらん。成功を以て人生の最大幸福となす、亦或は可あらん。たゞ謂ふ所成功とは何ぞや。現代の信する所にては、成功とは生存競争上の勝利、即富貴利達也。生存競争とは何ぞや。動物進化論の教ふる所に依れば、人は生存競争勝利に得て今日を致せるが故に、須く常に競争し、常に勝利を博せよと云ふか。然らば其競争の目的は何ぞや。現代はこれを自己の利益なりと信じつゝあるが如し。利を求めて壓く事を知らざるは現代の一面也。現代の國家然り。現代の個人然り。偶々他國の爲他人の爲に盡力しつゝあるが如きも、實はそれが自己の利益を齎せば也。故に意志は最も尊重せらる。最も意志の強大なる者が、最も勝利を博するは明也。最も勝利を博する者は、多くは又最も同情を欠きたる者也。古來日本人の思想を流れたる道念種々なりと雖も、其仁愛を重んずるは、儒教も、武士道も、佛教も、神道も、皆

一致す。生存競争が古來の道德思想と衝突つゝあるは暫く云はず。生存競争は彼等が以て人生の目的となす所の幸福を與へざる也。勝利を博する者は寡く、敗亡する者は衆し。敗亡したる者が不幸を極むるのみに非ず、勝利を博したる者もさまで幸福ある能はざる也。勝利を博して一人傲るには人心の組織。餘り妙なりとせず。利益を壟斷して、敗者を睥睨すべく、怵惕惻隱の分子多きに過ぎたり。況んや利益そのものが運命の前に常に安全ならざるをや。故にかくの如き生存競争に由りて幸福を得る者は一人も非ざる也。動物進化論は動物進化論也。心靈の問題に干涉するに過ぐる勿れ。進化の秘義は微妙也。淺薄なる演繹を恣にせしむる勿れ。儒教や武士道の道念は、アダム、スミスが人の競争心を本とせるが如き道德主義の伺ふを許さざるものあり。それをして速に退く可き所に退かしめよ。生存競争は終に現代より悠々蕩々の旨趣を奪ひ

去んぬ。成功主義はさなきだに社會組織より生ずる狂奔の弊害著しきを煽動して停止する所からしめんとす。所謂文明は何をか其出發点とする。人の競争心か、同情心か、自由競争と人道とは兩立するを許さず。自由競争を是認して、一面に人道を鼓吹する許り、天下に阿呆を極むるはなく。文明は益々誤りつゝあり。社會は益々俗惡を極めつゝあり。餓鬼道に陥りつゝあり。誤られつゝある進化論は世界の平和を攪亂する刃也。二十世紀のナポレオン也。

現代の成功は不成功也。現代は先づ須く成功の意義を顛倒するを要す。孔子を現代に立たしめよ。南洲を現代に立たしめよ。彼等は如何に不成功ならん。社會に道あれば衆とこれに由り、道なければ獨り信する所に由る。偉人は多く一世に容れられざりし者也。彼等は常に社會の水平線を出づれば也。故に地上の塩とあるを得たり。天下の木鐸となるを得たり。社會はこれに

由つて改造せられたり。社會は不精／＼にもこれに従はざる可からざりき。中島博士高等商業學校にて倫理を説くに當り、教育の目的は現代の用に非ず、來るべき時代の用なりと語りたりと聞けり。漱石は云ふ、理想なき自由は墮落ありと。理想なき社會は墮落せざらんと欲するも亦得可べけんや。

成功の福音は恐く舶來ならん米國あたりの輸入ならん。實に明治が輸入したる俗惡なる思潮の大あるもの也。なまじい健全ある思潮と銘を打ち、社會も之れを然諾する丈、益々其毒の深く大あるを恐る。日本が未だ思想の獨立を宣言する能はざるは現今第一の憾あり。されど成功の福音の如きを、わざ／＼米國に傾聽するに至つては不見識も極れりと謂ふ可し。フロードか蘇國の大學に於ける演説の中に、米國の教育制度を難じて、米國は何人も生れながら人生に對する出發点の平等なるを誇れり。而して彼等は何

共和國の大統領たる機會を有するを、知りこの希望に刺激せられて努力しつゝあり。米國の青年の目的は成功也。彼等はレースのランナーの如し。最善の地位に向つて押分け、衝進み、果てしなき競争のために奮闘しつゝあり。かくの如き制度は社會の階級の未だ定まらざる、大權の中心の動搖せる米國の如き社會にして始めて行はる可き事なり。されどかくる制度は決して永續する能はず。かくる制度の下に社會は決して存立する能はず。殊に想像せられたる桂冠は僅少にして、競争者は衆多ある知らざる可からずと論じ、スピノサの語を引用せり。曰く

予の確信する所に依れば、人生の幸福は一人の之れを所有するが爲に、他は損害せらるゝが如き事物に存せず、むしろ何人も之れを所有し得可く、一人之れを所有すれば、他の富を増進し得るが如き事物に存す

と。孟軻も已にスピノサと同調の金言を發せり

曰く。

求則得之。舍則失之。是求有<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>得也。

求<sub>二</sub>在我者<sub>一</sub>也。求<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>道。得<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>命。是

求無<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>得也。求<sub>二</sub>在外者<sub>一</sub>也。

と。人生の幸福他あらんや。他あらんや。

其特色を概論すれば、東洋の思想は差別中に平等を觀んとし、西洋の思想は差別中に尙も差別を觀んとす。故に其思想東洋は靜思的也。西洋は活動的也。精細は西洋に求む可しと雖も、幽玄は東洋に求めざる可からず。我邦に顯はれては、奈良の美術とあり、道元、法然の宗教とあり、東山時代の繪畫とあり、能樂となり、西行、芭蕉の詩とありたるもの、人類の誇也。宇宙の寶也。現代はこの寶を棄てて株券に憧憬する時代也。抑もいづこをたゞきてか幽玄の響を聽くを得ん。僕は時に現代に對する反動として、大乘佛教の梵鐘を鳴らすの當を得たるに非ざるかをさへ思ふ。敢て厭世に導かんとには非ず。幽

玄の樂天は進ましめんが故に。現代の社會は速にせめて漱石の草枕を愛好するまでに至らざる可からず。日本は羅馬に非ず。必ず非ざる可く必ずある可からざる也。武力そも何の誇ぞ。現代が武勳を以てたり顔をかしつゝある時。世界の拍手に自惚れつゝある時。富嶽は深くため息を洩らつゝあるかり。はた常識と拜金とを以て何を世界に誇らんとするぞ、何を人類に貢獻せんとするぞ。常識と拜金とをして速に至當の位置に平伏せしめよ、カアネエギ―を速に太平洋の彼岸に追拂へ。而してカアネエギ―の國には、フランクリン、ロウズベルトの外に尙ほホイットマンあり、ロングフェローあり、我がラルフ、ワルド、エマソンある事を知れ。

(柏郎)

## 獨興一篇

龍田山は僕の庭園也。細川家は財産上かれより

得つゝある收獲僅少に非ざる可し。されどかれが與へんとする美と教訓とに對しては細川家與らず。僕はかれに由りて自然を戀へ始めぬ。會遊の山川、四明ヶ嶽も、月の瀬も、虹の松原も開門ヶ嶽戀も未だこの戀を教へざりき。教へざりしは僕が戀する能はざりしに由れり。戀せよさらば戀せられんといみじくも古人曰ひぬ。僕の眼球の閉ぢざる間、光線の照らす處、僕はこの戀棄つる能はざらん。

此頃の龍田山の朝、げに心あらん人に見せたし地蔵の側より綠濃き林の中を登る。僕は一卷のエマソン集とホツケツト、デイクセヨナリとを携へたり。一鳥鳴かず、かさこそど落葉踏む下駄の音のみ耳をすましむ。古は清正が太閤を祀れる社あり、その建築の金色燦爛とてために畫津に魚住まざりしと傳ふる跡、今は大なる巖一つ、淋しく迷信の對象とありて、大小様々の旗、中には山鹿町何某、五十九才なぞものせる



をあまたさう列べたり。おは登りて右手に析れ、進むこと暫くにして景色開け、前に逶迤たる連峰を望む。其處より叢の間を左に下るに、

朝露繁くしてズボンはじとくある。「龍田山林字山田千五百十七番」と標建てる處、山中一條の道路通へり。あたりは眼も遙かに開墾せられて一面の畝なり。黄ばみたる麥の穗越しに遠く蘇峯の烟一抹ゆるく天を摩して、淡としてあがらんとす。路傍大なる常盤木まばらに遠く立列べる中、一きは老いたるが、その根株廣く蟠れるあり。これ僕の安樂椅子也。朝日を避けて、阿蘇、麥畑を後ろにして身を横ふ。前は淺き谷を隔てゝ山林あり。伐木の音を聞く。山林の上に三ノ嶽の翠微を見る。四邊はオグンにみちみち、松籟調々として耳に清し。かくて靜にエマリン集を読むが此頃の例あり。

コンホルドと龍田山と、處は太平洋を隔てゝ遙に哲人と僕と時は相距るは、數十年なりと雖も

、哲人の音容は僕に髣髴として、僕は其前に坐し、其聲を聞く、空間と時間とまことに影に似たるかな。

ホイットマンあり。ロングフェローあり、我がラフ、ワルド、エマソンある事を知れ。

一卷のエマソン集は楠は聖書を讀むが如く。アラトを讀むが如く、ウオヅウオリスを讀むが如く、時に語孟を讀むが如く、はた陽明を讀むが如し。僕はエマソンを讀んで常に東洋思想を離れざる也。

頃者圓環論を讀んで、いたく僕の興を引けるエマソンが思想の一面あり。彼れのヒロニズム是也。

報償論の前半は、物々兩極あり。事々兩面あり大は天地より、小は毫末に至るまで皆然らざるなり。禍に福あり。福に禍あり。福以て喜ぶに

足らず。禍以て悲むに足らざるを論して、二見  
恰も一切の行爲の無差別なるを教ふるものと如  
し。圓環論にては

「すべての行爲は更に之れを超越する行爲を否  
む能はず」。「自然は終無し、凡ての終は始也」。  
自然に一の固着するもの無し。万有流轉也。定住  
は比較上の語に過ぎず。我が地球は神より見れ  
ば透明の法則にして、事實の集合に非ず。法則は  
事實を溶解して流動せしむ。粗雜ある結果の後  
ろには微妙ある原因あり。仔細に驗する時は、其  
原因も更に微妙なる原因の結果たり。万物が定  
住すると見ゆるは其秘密の知れざる間也。定住  
は比較上の語也。万物は媒介的也」。「凡て最後  
の事實は新しき連續の始たるのみ」。「唯一の罪  
惡あり。制限是也」。「原因と結果は一事實の兩  
面也」。「最大の慎重は最愚の慎重也」。「是の義と  
する所は、彼の不義とする所也是の美は彼の醜  
也。是の賢は彼の愚也。蓋し同一物を一人は一

層高所より觀れば也」。「譬へば一人は思へらく  
義は負債を支辨するに在りと。かくて他が此の  
義務を怠勝ちにして、債權者をして煩はしく憎  
預せしむるを憎惡する事限あし。然るに第二者  
は他の方面より事物を觀る。自う問うて曰く、  
予が先づ支辨す可き負債は何れぞや。富者への  
負債乎。はた貧者への負債乎。金錢の負債乎。  
はた人類に對する思想の負債乎。性に對する天  
才の負債乎と」。「夫れ徳は一として終なるもの  
はあらず。凡ての徳は始也。社會の徳は聖者の不  
徳也」。

かくてニマソンは人の已れを汝は美はしきヒロ  
ニズム、凡ての行爲の無差別に到れり。吾人若  
し誠實あらんには、げに吾人の罪も眞の神の宮  
を築く可き生ける岩となりぬ可しと教へて吾等  
を誤らんとすと云ふ者あらんも、予はこれを辯  
せんとして煩はざる可しとて曰く。予は萬  
事を肯定せず、事實は一として、予に聖きもの

無し。一として予に穢れたるもの無し。予は單に經驗せんかな。後ろに過去を有せざる無窮の進求者たらんと。エマソンは又精神法論の中に、「人は皆彼れが同一の理由を以て万事を肯定し且つ非定し得可き中間に位するを知らん。彼は老也。彼は幼也。彼は甚だ賢也。彼は全く愚也」。「毎日吾人の周圍に生じ來る事物に就きて少しく考慮せん乎。吾人は知る。意志の法則よりも一層高き法則ありて事件を支配し、吾人が強作勉強は不要あり、無益なるを。容易に、單純に、自發的ある活動に依りてこそ獨り吾人は力あれ。自己に従順に満足して、始めて吾人は神聖也。」「チモレオンの勝利は最も善きものなりき。そは。そはホーマアの詩の如く走りぬ、流れぬとぞアルタークは曰ひける。」「吾人はセイザア、ナポレオンに先見洞察の明を歸する事屢々ながら、最もよき彼等の力は自然に在りて彼等に在らざり也。」「沙翁は沙翁を研究する能は

ず。」「この教訓は人生は吾人の信じつゝあるよりも簡單に、容易なる事を示す、世界は更に幸福なる地也。」「

太靈論にては個我の意志、知識の薄弱なるを論ずる事更に審也

僕は此に於てか莊周の齊物論を讀むの感をなすあり。

曰く「物無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>彼。物無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>是。」「其分也成也。其滅也毀也。」「有<sub>レ</sub>左有<sub>レ</sub>右、有<sub>レ</sub>倫有<sub>レ</sub>義、有<sub>レ</sub>分有<sub>レ</sub>辯、有<sub>レ</sub>競有<sub>レ</sub>爭」と。「方生方死。方死方生。方可方不可。方不可方可。因是因非。因非因是。是以聖人不<sub>レ</sub>由而照<sub>二</sub>之于<sub>一</sub>天。亦因是也。是亦滅也。彼亦是也。彼亦一是非。此亦一是非。果且有<sub>二</sub>彼是<sub>一</sub>乎哉。果且無<sub>二</sub>彼是<sub>一</sub>乎哉。彼是莫<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其偶<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>之道樞<sub>一</sub>。樞始得<sub>二</sub>其環中<sub>一</sub>。以應<sub>二</sub>無窮<sub>一</sub>。」「是亦一無窮。非亦一無窮也。故曰莫<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>明。」「莊周は安立の地、即彼が以て明とする處を教へて曰く。

「不用而寓諸庸。此之謂以明。」不用而寓諸庸。庸也用也。用也通也。通也得也。適得而幾矣。因是已。而已不知其然。謂之道」と。されどエマソンが莊周と終に一致する能はざるは、エマソンは無差別を以て満足する能はざる也。莊周と一致するはエマソンの一面也。彼れは莊周の如く人生に於ける價值を減せんとせず。あらゆる標準を奪去らんとせず。蓋し僕の薄弱ある研究より得たる所にては、莊周の道には向上的、進化的旨趣無し。彼は無爲を説くと共に有爲を説く。彼れに積極的一面あり。されどそは變化を御する道にして、向上發展の道に非ず。エマソンは然らず。其作爲を用ひざるは一也。されど莊周は諸れを庸に寓し、エマソンは諸れを心<sup>ソウル</sup>靈に寓す。エマソンが何に由て神の存在を曰ふかは。此に語らんとする目的に非ざれば暫く措きて云はず。彼れは大靈在りとなす、彼れは所に從うて或は大靈と曰ひ、或は神と曰ひ、

## 八十八

或は宇宙精神と曰ひ、或は「一」と曰ひ、其他種々の名を與ふれ共皆一也。彼れはクリストと等しく大靈万有に在り、万有大靈に在るとあらず、万有に在る大靈是れ心靈也。而して彼れの大靈は自然と生命と眞と徳と美との故郷也。泉源也。故に心靈は眞、徳、美、力、自由、愛、義等を以て屬性となす。心靈は相對に非ず。部分に非ず、十全也。生々轉化して息む時なく、肯定して非定を許さず、混沌を變じて秩序となし、常に樂天主義を宣べて、厭世主義を肯せざる也。心靈が上の如き屬性を有するとなすは、孟軻が心<sup>シン</sup>（心靈）は仁義の屬性を有するとなしたるに等し。唯だ孟軻は眞、美を逸したるのみ。心靈が樂天主義を宣ふとあらずは、陽明か樂者心之本体と曰ふに似たり。故にエマソンは價值を認め、標準を失はず、心靈は價值也、標準也。變化を御するに非ず。常に心靈の轉化を仰ぎつゝ、人生は驚異の連續ありと曰ふ。莊周は曰ふ、若し有眞宰

而特不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其朕<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>行己信。而不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其形<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>情無<sub>レ</sub>形と。エマソンは其朕を得たり。靈は靈を知る。彼は時々天啓を得つゝありき。自特論には、彼が最上眞理として、其直覺を述べたる雄大なる一節あり、大靈論は彼れの天啓を記載したるものと稱して可。彼れの天啓は吾人の精神に宇宙精神の流れ入るを云ふ。其時は常にサブライムの情念を伴ひ、個人的河流は、この大海潮の前を退き、敬畏と悦樂とを以て吾人をするのふかしむむ。是れ、天地は觀念の流れとなり、時空の障壁は奪はれ、因果の鐵鎖は破らるゝ時。永遠を一時に攝し、一時を永遠に舒ぶる時。僕はエマソンのオウソリテの存する所を察するに苦まず。エマソンを傳ふる者この天啓を傳へざるは如何。夫れ莊周の眞宰もエマソンの大靈と相隔つる所あり、莊周も眞宰に生命を托して答焉たり。エマソンも蕩々乎たり。大靈を受けて之れを顯はさんとする。然かも莊周は廣莫之野、

無何有之郷を逍遙し、エマソンは眞善美の故郷に自適す。

僕は又小楠の詩を思はずんばあらず。

「止説人間閑是非。一吟一醉見<sub>二</sub>天機<sub>一</sub>。愛他好々南陽老。清濁混同渾不<sub>レ</sub>違。」「是彼又非<sub>レ</sub>此。是非一方偏。姑置<sub>二</sub>是非心<sub>一</sub>。心虛即見<sub>二</sub>天<sub>一</sub>」小楠も是非を沒せんとする者に非ずや。然り、高唱して曰く、「不用<sub>二</sub>作爲<sub>一</sub>付<sub>二</sub>自然<sub>一</sub>」と。何が故ぞ。「心官只是思。思則眞理生。或在<sub>二</sub>一身元生<sub>一</sub>。又入<sub>二</sub>天下平<sub>一</sub>。古今天地之事。莫不<sub>レ</sub>關<sub>二</sub>吾情<sub>一</sub>。寂然一室中。意象極分明。

神知靈覺湧いて泉の如くなれば也。そのエマソンと甚だ相近けるを覺ゆ。沼山津とコンホルドと、時を同じくして東西に立つ。何等の照應。何等の默契。莊周、小楠のみに非ず。親鸞も善惡の字知り顔は大そらごとの形なりと曰へり。佛家、儒家の派、老莊の流を汲む者より伺ひ來れば、此底の懷疑的態度を有する者殆ど際限無か

淨土真宗の純他力觀も其間髪を容れざるを知る  
自力即他力からすや。

久しうして倦めば卷を閉ぢて蒼苔を仰ぐ。浮雲の無心に往來するを惝恍す。正午のドンを聞き、ステッキを取上げ、寮に歸る。歸り來れば、陽明が所謂春秋戰國の人とありて、人を愛するの少きに非ず、自然を愛するの多きなり。ハヨンの感想を起す事稀ありとせず。

(五月三十日柏郎)

龍

南

らんとす。この如き達者皆自發的行爲の最善にして、吾人の意志と稱するものゝ無力なる、長くへに作爲を離るゝ能はざるは、長しへ安立する能はざる所以、終に偉大なる力を得るに至らざる所以あるを教ふる事一也。僕これらの達者を以て皆他力の信者ありとあす、非平。(エマソン曰く、我等哲學にては神の人格をのみすれ共、一たび心靈に歸依の情念作用ゝ來る時は、我等が心情と生命とを捧ぐ可き神、自づから形と色との衣を着けんと。莊周の眞宰と、程朱の理と、クリストの神と、小楠の天と、暫く其區別を問ふ勿れ。)故に僕は Be. Trust thyself エマソンが個人主義の獅子吼も、

たゞほれくと彌陀の御恩の深重なることつねにたもひいだしまゐらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ。これ自然ありわがほからはざるを自然とまうすなり。これすあはち他力にてまゝです。